

元素の周期表（一部） 現在知られている 118 種の元素を並べた表です。縦に並んだ元素同士の化学的性質が似るように原子番号順に配置されています。2016 年に命名されたニホニウムの探索研究には、理学部同窓生 6 人が共同研究者として参加しました。この周期表の空欄に入る元素はなにかわかりますか？



昔を想い、未来に願う

理学部同窓会会長 野本 憲 雄

香港のデモのニュースを見ていて参加者の多さに吃驚した。そして、学生の頃を思い出した。時は「60年安保改定」の頃で、ラジオを聴いていた隣の部屋の友人が「大変だ！革命が起きそうだ！」と飛込んで来たりもした。国会周辺では連日激しい「安保闘争」が繰り広げられ、とうとう国会前で東大生の樺美智子さんが亡くなられたことを思い出した。闘争の中核は、いまでは聞くこともないが、「泣く子も黙る」と揶揄された「全学連」であった。その後も「東大の入学試験」の実施が不可能になって受験生の人生に影響を及ぼしたり、「よど号事件」や「浅間山荘事件」など社会を震撼させる事件が続いた。「70年安保闘争」も激しかった。しかし、その後学生運動は「セクト」間の対立が激化し「セクト」は離散集合を繰り返して、「八岐大蛇」のようになり、「内ゲバ」の犠牲者を出しながら霧散してしまったかのようである。「全学連」もほとんど聞かなくなった。

いまの学生さんの社会への関心はどのなのだろう。哲学者の三木 清は、我が国が日中戦争に突入した年に「今日の学生の勉強意欲低下は彼らの将来に希望がないからと言われている。もっと勉強せよ」と、「何のために」と反問される。……学生の勉強意欲は彼らの社会的関心と関係している」と書いているが。

いま高齢者による悲惨な重大交通事故が立て続けに起きたり、通学途上の小学生等の殺傷事件、親・親権者によるわが子殺しなど、遣る瀬無い事件が頻発している。また、老後安心し暮らすに必要な資金を巡る厚

生省の審議会報告の問題も飛び出している。国際的社会に目を向けると、アメリカと中国の間の貿易問題、イランの核合意を巡る問題、ホルムズ海峡でのタンカーの攻撃事件、イギリスのEU離脱を巡る政治的混乱、EU議会構成の問題など、一体世界はどこへ向かうのか、世界は安定するのだろうかと心配するばかりである。30年ほど前ベルリンの壁が崩壊した頃には、これで東西冷戦は終り、平和な良い時代になると何となく期待したものだが。

絶世の美人パンドラが神々からの贈り物を詰めた「パンドラの箱」は、エピメテウスがパンドラの制止と、「ゼウスからの贈り物は絶対に受け取るな」という兄の言葉に背いて蓋を開けてしまった。箱の中からは、「病気」、「悪意」、「戦争」、「嫉妬」、「災害」、「暴力」、「殺人」が飛び出して平和に暮らしていた人間に降り注いだ。そして、箱の中には唯一「希望」だけが残り、ために人間は、生きていくのに「希望」だけは失わなかったのだという。せめて、唯一残った「希望」だけは無くならない世界であり続けて欲しいと思っている。

詩人ポールエリュアール（仏）は、「歳をとる、それは己の青春を歳月の中で組織することだ」と言っている。これまでを想い、これからに願うことである。





理学部の近況

理学部長 前野 貢

同窓会の皆様には、日頃より大変お世話になっております。国立大学法人は、第3期中期計画・中期目標期間（6年間）の4年目を迎え、今年度は中間評価を受けるための報告書作りをおこなう年です。また機関別認証評価という教育評価を2021年に受けるための準備も始まります。このように、大学は外部評価受審のための準備で忙しくなりつつあります。一方、理学部は、新しい理学科の学生を迎え3年目となり、各プログラムに配属された学生たちはそれぞれの専門分野の授業・実習の真っ盛りです。本会誌では、理学部の改組後の状況、そして理学部で取り組んでいる特徴的な事業について紹介します。

●開学70周年を迎えて

今年度は新潟大学にとって70周年の記念すべき年です。これまで長きに渡って地方の拠点大学として存続してきたことは大変輝かしい功績です。新潟大学は、広大な県土がもたらす豊かな自然を恩恵に、そこに住む人たちが真に幸せな生活を送るために必要な地方の学舎（まなびや）です。そして理学部は基礎科学の要となる学部です。社会が時代とともに変容していく中で人類と自然との共生のためには、基礎科学が充実していなければ対応できないと思います。時代の流行りの学問分野だけを育てても、時代の変化には耐えられません。基礎科学の発展を担うのは、これまでも、これからも、好奇心の強い若い世代の人間たちです。理学部は、長い将来を見据えて、人類と自然との共生を科学によって解決を目指す若者を継続的に育成していく使命があると思います。

●学部教育の状況について

新カリキュラムのもと現3年生は各プログラムの専門分野の学修を進めています。この学年の学生は昨年の第2学期にプログラム選択を行いました。在籍する214名の学生のうち203名がプログラム選択をおこない、その内訳は、今年4月1日現在で、数学30名、物理学37名、化学38名、生物学30名、地質科学21名、自然環境科学36名、フィールド科学人材育成11名となりました。すべての学生が第一希望のプログラムを選択することができたことは学生目線から見て大変好ましい結果だったと思います。また現2年生への最新のアンケート調査（今年2月）によると、生物学プログラムへの希望者が受入れ上限数を2名超えているものの（30名に対して32名希望）、そのほかのプログラムでは上限数内に収まっています。以上のような情報を今後は積極的に受験生に対しても発信し、安心して新潟大学理学部を受験してもらうように働きかけたいと思っています。

●高校生のためのシンポジウムの開催について

今年度も、高校生のためのシンポジウムを大学主催として開催しました。今回は5月19日(日)に、朱鷺メッセ国際会議場にて、フィールズ賞受賞者である、京都大学の森重文先生に「数学の最先端～双有理幾何学の

世界～」というタイトルでご講演をいただきました。高校生を中心に400名以上の若者たちが集まり、熱心に先生のお話に耳を傾けました。例年通り、高校生から先生に質問をするコーナーでは多くの質問で盛り上がり、先生との楽しいやり取りがありました。改めて新潟には数学が大好きな若者がたくさん居られることを感じ、このような次世代の科学を支える人材を、高校や大学が育成していく責任を痛感しました。このような事業を継続的に開催することで、高校と大学の連携も強固となり、学舎としての大学が広く地元で周知されることになると思います。来年も同様の企画を計画しておりますので、ご期待ください。

●新潟ジュニアドクター育成塾の実施について

今年度から5年間、科学技術振興機構（JST）の支援を受け、新潟大学は「自然と人の共生を科学する新潟ジュニアドクター育成塾」という事業を実施します。この事業では、理数・情報分野の学習を通して、高い能力を有する小中学生を発掘し、さらに能力を伸ばさせることを目標とし、新潟独自のプログラムを開発・実施するものです。具体的には、毎年40名の小中学生（5年生以上）を選抜し、1年目は15回の科学基礎講座、体験学習を行います。理数の各分野の科学基礎講座のほか、体験学習では、佐渡島での合宿研修をはじめ、糸魚川ジオパーク、新潟大学脳研究所、県立植物園、一正蒲鉾(株)での1日研修などを行います。2年目には、10名の受講生を選抜し、大学の研究室に配属させ、個別の課題研究に取り組みます。2年間のプログラムを修了した受講生には「新潟ジュニアドクター」の称号を授与し、修了後も課題研究の継続を支援します。

6月15日(土)に、大学ライブラリーホールで本事業の説明会が開催され、多くの小中学生と保護者が参加しました。7月27日(土)には入塾式を開催し、基礎科学講座もスタートする予定です。理学部の教員が中心となって本事業を実施しますが、教育学部、大学附属小中学校、工学部、農学部、医学部、脳研究所、佐渡自然共生科学センターなど、多くの部局・研究所・センターの協力をいただいております。大学として、理学部として、地元の子供たちにとって身近で頼れる学舎となり、また前述のシンポジウム開催の趣旨と同様、多くの若者たちが未来の研究者を目指してくれることを願っています。

●最後に

昨年度の入試では理学部や工学部における後期日程の受験者の志願倍率が3倍を下回り、理工系分野を目指す若者の層が薄くなっている状況が再認識されました。他の地方大学と比べてもこの傾向は新潟大学に顕著です。改組をきっかけに新潟県、隣県の高校への学部広報の強化を務めているところですが、今年は昨年以上にたくさん的高校を訪問し、理学部の充実した教育プログラムを説明する予定です。同窓会の皆様にもいろいろとご心配をおかけしますが、今後も引き続きご支援をいただけますようお願い申し上げます。

学 科 だ よ り

数 学 科

数学プログラム

プログラム長 渡邊 恵一

本年3月には数学科4年生36名が卒業し、うち23名が企業・公務員・教員に就職し、8名が大学院に進学しました(6名が本学)。また、博士前期課程を10名が修了し全員が就職しました。4月には、3年次編入生6名を含めた37名が数学プログラム3年生となりました。これは改組前の定員とほぼ変わらない人数です。推薦入試による入学者とフロンティア・スタディ・プロジェクト採択者は、合わせて1年生14名と2年生12名がいます。これら数学プログラム配属が内定している学生と教員の交流会が4月に行われました。企業への就職状況が良いことが理由かもしれませんが、ここ数年、博士前期課程(修士課程)への進学者がやや少ない傾向にあります。

直近のハイライトは何といっても森重文先生の講演です。5月19日に、1990年にフィールズ賞を受賞され、代数幾何学の研究で世界をリードし続けている森重文先生(京都大学高等研究院院長)をお招きし、高校生のためのシンポジウム「数学の最先端～双有理幾何学の世界～」が開催されました。本シンポジウムは、主に県内の高校生に世界トップレベルの研究を直接体感してもらい、科学への関心を高めてもらうことを目的に理学部が企画したもので、高校生182名を含む420人あまりが会場である朱鷺メッセ4階のマリンホールに足を運びました。明るいお人柄の数学プログラムの星明考准教授が司会を務め、2013年3月に退職された吉原久夫名誉教授、小島秀雄教授を交えたパネルディスカッションも行われました。その後の質問コーナーでは、森先生に直接質問できる機会とあって、会場では高校生をはじめとした多くの方々からの挙手が時間いっぱいまで止みませんでした。

より詳しい様子は、上記の紹介文のもとになっているwebページ https://www.sc.niigata-u.ac.jp/sc/info/symposium2019_fin.html をご覧ください。

高校等の教員となっている方々が生徒さんを引率して来られたり、また一般の聴衆として参加される等、数学科の卒業生の皆様から多大なご協力をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

7月10日には、新潟県立高田高等学校の阿部修也さん(2008年3月卒、2012年3月博士前期課程修了)と茨城大学工学部の阿部敏一さん(2009年3月卒、2014年3月博士後期課程修了)による今年度の第1回数学科(数学プログラム)講演会が行われます。

7月24日には、数学分野の進路となる企業研究者による理学部コロキウムとして、微細プラスチック製品の製造を得意とする hakkai 株式会社の桑原俊平さん(2006年3月卒、2008年3月博士前期課程修了)が「製造業における統計的工程管理」という題目で講演されます。

同窓生の皆様には、今後とも変わらぬご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

物 理 学 科

物理学プログラム

プログラム長 摂待 力生

物理学プログラムでは、今春3月に50名が卒業し、その内39名が大学院へ進学しました(内、新潟大学は33名)。就職率は100%で、県内企業に2名、県外企業2名、県内公務員2名、県外公務員1名、県外教員1名でした。

人事異動としては、素粒子理論物理学分野の浅賀岳彦先生が、4月に准教授から教授へ昇任されました。素粒子物理学分野は、これまでも数多くの学部生・大学院生を輩出してきた人気の高い研究分野で、今後多くの大学生・大学院生の教育・研究に携わっていただけることと思います。浅賀先生は、高大連携活動にも大変積極的で、ニュートリノ研究でノーベル賞を受賞された梶田隆章先生を2017年にお招きして、高校生のためのシンポジウムを開催した際にも、梶田先生との交渉や、多くの高校への広報活動を行いました。さらに、今年度から小・中学生を対象に、「自然と人の共生を科学する 新潟ジュニアドクター育成塾」事業(科学技術振興機構)がスタートしますが、浅賀先生はこの事業の立案・申請に尽力され、今後の実施に向けて中心となって取り組んでいます。また、浅賀先生は、今年度から高大連携・広報担当の副学部長にも就任されましたので、理学部全体の活動においても幅広くご活躍いただけたと思います。

物理学プログラムでは、平成29年度から5年間の事業として、学長裁量経費事業「量子科学を軸とした医学物理融合研究と国際共同研究の戦略的促進」を推進しています。医学物理融合研究では、素粒子・原子核実験での微弱放射線検出技術を医療機器開発や重粒子線治療に応用するための基礎研究や、医学物理士育成や物理の素養を身につけて医学医療分野へのキャリアパスとなるようなカリキュラムの開発を進めています。3月末には、新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」で「新潟大学医学物理シンポジウム2019」を開催し、医学物理学に関する研究・教育の取り組みについて、大学内外の関係者の情報交換や交流を行いました。来年度4月から大学院の物理学コース内に、医学物理学人材育成プログラムを開設することを目指しています。また、国際共同研究に関しては、グローバルに活躍できる若手人材の育成を目指し、「博士研究者を目指す学生のための国際共同研究挑戦プログラム」として、海外渡航費や国際共同研究の実施、研究発表などの研究費を支援しています。初年度は博士課程の学生のための支援でしたが、昨年度はさらに研究室配属された学部生まで支援の枠を拡大しました。当学部生は、オランダ・アムステルダム大学ファンデルワールズゼーマン研究所で、高圧・極低温での物性研究のための装置開発に取り組んできました。

ごく最近のイベントとしましては、第1タームと第2タームの間の6月11日に、恒例となっている物理学

プログラム「ケルビン祭」(第17回)を開催しました。大学院入試説明会の後、物理学科卒業生の寄付金を基にした「中山賞」と、同窓会物理学科支部の支援を受けまして、「物理学科同窓会奨励賞」を成績優秀な4年生6名に授与しました。卒業へ向けての勉学、さらにその後の人生において多いに励みになることと思います。同窓会の皆様には、この場を借りてお礼申し上げます。また、授賞式の後には、学生と教員による対話集会、大学院生・学部4年生による研究室紹介が行われました。研究内容を基にした動画作品もあり、研究テーマを題材に刑事ドラマ仕立てに動画で紹介した研究室が、学生による人気投票1位に選ばれ、会場を沸かせていました。ケルビン祭の最後は、理学部駐車場広場で、各研究室で様々な料理を出しあい、学部1年生から大学院学生、教職員の交流を深めました。

平成29年度の改組後、1学科として入学した新入生もすでに3年生となりました。改組にともない授業科目に各プログラムの専門力アクティブラーニング科目が導入されました。物理学プログラムでは、さらに学生の主体的な学びを促進するため、新潟大学学長教育助成制度への申請課題「反転授業による専門講義科目のアクティブ・ラーニング化」の採択を受け、大野義章教授を中心として、反転授業などを取り入れた取り組みも始めました。今後も学生の教育・研究の充実に向け努力してまいりますので、同窓会の皆様には、引き続きご支援のほどよろしくお願いいたします。

化学 化学プログラム プログラム長 生駒 忠昭

平成30年度は34名が化学科を卒業されました。卒業生のうちの5名は企業に就職され、3名が公務員、1名が教員になりました。大多数の卒業生は、例年通り大学院へ進学されました。しかし、化学プログラムの大学院進学率(40~60%)は同規模の国立大学理学部化学系に比べて10%以上も低いです。4年生で課題研究を実施しますが、わずか1年で成果が得られる研究は稀です。当プログラムの教員は多彩な分野の先端研究に取り組んでいる化学者でもあります。個性豊かな化学者の下で、真理の探究に没頭したいと望む卒業生が増えることを私は願っております。

大学院進学率アップを期待する化学プログラムは、化学プログラムの学生を対象にした進路説明会を毎年開催しております。説明会では、大学院進学を進路の一つとして早い時期から検討してもらうため、就職の内定した大学院生に就職活動の実体験を講演してもらっています。講師は参加者にとって直ぐに役立つ事柄を話してくれるため、講演が学部生にとって共感しやすいHowToものとなり、参加者の評判は概ね良好です。しかし、HowToは時が経つとエピソードに風化しがちです。そこで平成30年度は、長期的なキャリアパスを考える機会を提供する目的で、“同窓生と在校生の交流会”を開きました。この交流会を「化学ホームカミングデー：卒業生と在学生の交流」と名付け、

全学イベント(新潟大学 WeeK2018)の一企画として開きました。具体的には、平成30年10月28日(日)14:00~17:00理学部B棟301講義室で行いました。同窓会化学科支部の全面的なご支援のおかげで、企業研究者・公務員・教員として現在活躍中の化学科卒業生4名(1981卒1名、1993卒1名、1977卒2名)が講師を引き受けて下さいました。そして、交流会には約30名の学部生・大学院生が集い、講師も聴衆も率直に語り合える双方向集会となりました。期せずして、4名の講師は本学大学院博士前期課程を修了した後に就職された方々でしたから、大学での学びに加え大学院での研究経験が実社会でどのように活かされるかについても語って下さいました。型通りの事しか言えない大学教員とは異なり、講師の一言一フレーズは経験に裏打ちされた説得力に満ち溢れており、参加者の記憶に残るお話が沢山ございました。見えない将来を気にする余りに思い煩う大学生・大学院生のメンタリティーは、時代が変わっても同じです。“同じ釜の飯を食らった”先輩の生き様は、前へ踏み出す勇気となって不安を抱える若者に伝染します。今後とも、化学プログラムをご支援くださいますようお願い申し上げます。

生物 生物学プログラムの近況 プログラム長 酒井 達也

生物学科の近況をご報告します。教員は分子生物学分野を担当されていた内海利男教授が定年によりご退職されました。一方、同分野の伊東孝祐先生が准教授に昇任されました。学生は3月に25名が卒業しました。その内訳といたしましては、大学院進学11名、就職11名(企業7名、公務員2名、教員2名)、その他3名、となりました。

本年度は理学部改組後3年目を迎え、4月に理学科生として新入生を迎えています。生物学プログラムを選んだFSP学生と推薦入学生は9名いました。生物学プログラムでは、一つ上の学年のFSP・推薦入学生がチューターとして、新入生のFSP・推薦入学生の履修登録・オリエンテーション等を支援してくれています。3年次編入生は2名を迎えました。それらの1・2年次のFSP・推薦入学生、3年次編入生を招き、4月第三週金曜日の夜に教員との懇談会を行いました。今後の活躍を楽しみにしています。昨年度2学期には、理学科2年生(現3年生)の30名が生物学プログラムを主専攻プログラムとして希望し配属されました。これまで1学年定員20名だったのが30名まで増え、専門科目の実習室がほぼ満員となる人数となり大変活気がでています。配属決定した2年生(現3年生)の歓迎をかねて、9月末に生物学プログラム全体の夏の懇親会を第一食堂で行いました。新入生と意見交換をする等、交流を深めました。

生物学科同窓会との関係では、2月16日(土)に新潟高校で開催された教材生物研究会とつなげる形で、生物学交流会を県内高校生物教員の方と一緒に開催しました。新カリキュラムで初めてプログラム配属された2

年生が、どのような流れで配属に至ったのか、高校の先生方に紹介されました。またかねてより高校教員の方から希望のあった井筒教授の発生学解説の講演をいたしました。その後、近くのホテルで懇談会を催し、県内高校生物教員との交流を深め、大変有意義な会になりました。

昨今の大学のスリム化運営により、退職者補充が絞られ、生物学プログラム教員の高齢化が進んでいます(現在の平均はおよそ53歳)。11年後まで未補充が続くと、教員が3名にまで減少することになります。新規補充がなければ更なる改組、さらに大学合併等でカリキュラムを維持する必要がでてくるかもしれません。日本の少子高齢化を背景に、日々変化する大学運営の状況に対応する努力が求められています。同窓生の皆さまの一層のご支援をよろしくお願いいたします。

地質科学プログラム

プログラム長 小西 博巳

理学部同窓会の皆さまには、毎年、ご援助を頂きましてありがとうございます。今年度も春に実施している大巡検(2年生最後の授業で県外の代表的地質体を巡る旅行)の旅費の一部に使わせていただきました。お礼申し上げます。

今年春には学部生23名、院生(修士課程)10名が卒業しました。学部生の進路は、新潟大学大学院自然科学研究科修士課程に進学8名、建設コンサルタント等地質系企業5名、公務員4名、教員1名、メーカー、IT、流通など4名、自営業1名です。院生の進路は、自然科学研究科博士課程への進学3名、建設コンサルタント等地質系企業6名、教員1名です。

学部改組により地質科学科から地質科学プログラムに変わって3年目を迎えました。学部改組による大きな変化の1つは、理学科として一括して入試を行うようになったことです。そのため、地質科学プログラムに何人来るかは、2年生の秋までわかりません。同様な改革を行った他大学では、地質科学を希望する学生の入学が減っているところがあります。新潟大学でも、同様な傾向になるのではないかと覚悟はしていましたが、幸い、昨年秋に地質科学プログラムに配属された学生(現3年生)は21人でした。入学後の希望調査によると、今年秋に配属される学生(現2年生)も20数名になりそうです。改組前の学科定員は25名だったので、2割ほど減らしたことになりますが、まずまずの健闘ではないでしょうか。

地質科学プログラムへの配属は、2年生の秋になったので、本格的な専門の授業は2年生後半からになります。これまでのカリキュラムでは、1年生では巡検、2年生では沢調査、3年生で進級論文と段階的に地質調査の実習が積み重ねられてきましたが、新カリキュラムでは、やや時間の余裕のないものとなっています。今年の夏は、新しいカリキュラムでの初めての3年生の進級論文があり、新カリキュラム自体も試されることとなります。

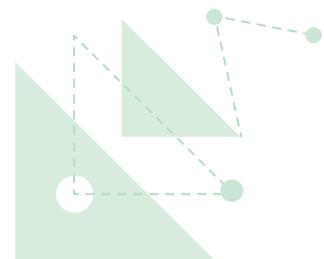
今年の進級論文は、長岡市の小国地域と、山形県鶴岡市の温海地域の2地域に分かれて実施します。温海地域は、進級論文のフィールドとしては初めての地域です。小国地域は堆積岩を主体とするのに対し、温海地域はドレライトなど火成岩が多く出てくる地域です。また、温海地域では、10人ほどで2週間ほど宿泊して調査を進める必要があります。試行錯誤はありますが、新しいカリキュラムのもとで、フィールドを重視した教育をより充実させるために、努力しています。

自然環境科学プログラム

プログラム長 副島 浩一

改組後初めて入学した学生が、昨年10月に自然環境科学プログラムへ配属されました。複数回おこなわれたプログラム選択調査の結果を見守っていた際は、環境プログラムを第一志望にしている学生が少なく、ヤキモキしていましたが、フタを開けてみると、受入上限に近い36名を新たに自然環境プログラムに受け入れることができました。これは喜ばしいことですが、入学直後から卒業まで学生と接する機会が多かった6学科体制の時と違い、改組後は自然環境プログラムというくくりで学生と接する時間がプログラム配属までの1年半単純に減ったことと、新歓、サマコン等のイベントが以前と比べると減ったため、自分のアドバイザー以外は学生の顔と名前がまだ一致しないという情けない状態になっています。学生さん自身も、これに似たジレンマを抱えているようです。同じクラスだった学生同士は名前と顔がわかるらしいのですが、クラスが違くと接点が極端に減るらしく、全く分からないとの事です。4年生になると研究室ごとに分かりますので、同じプログラムに所属していたことを、卒業直前の課題研究発表会の時に初めて知るなどという事が起こってくるのではないかと少し心配しています。学年を超えた強固なつながりを誇っていた自然環境科学科の学生の関係性が、このような事情で希薄になりつつあることを少し寂しく感じています。

一方、今年の4年生は、6学科体制最後の年に入学した学生さん達で、その年に学務委員を担当していたことから、彼らには少なからず思い入れがあります。当時の学務委員は、新入生ガイダンス、新入生オリエンテーション等の新入生を対象にした職務が多かったため、多かれ少なかれ、生まれたてのひな鳥を見守る親鳥のような気持ちになるもので、私もご多分に漏れずそういう気持ちで彼らの成長を見守ってきました。そんな彼らも最終学年になり、課題研究に真剣に取り組む姿を見ると、しみじみと立派になったなあと感じます。来



年3月の彼らの巣立ちをプログラム長という立場で見届けることになるわけですが、大学入学と卒業時にこのように関わるようになった彼らとの間には少し縁を感じています。

令和元年は1つの区切りがつく年度となったわけですが、新しい年号で年が重ねられていくと共に改組による良い面が現れることを期待し、その変化を学生さんと共に楽しみたいと思っています。

フィールド科学人材育成プログラム

プログラム長 本田 明治

平成29年度の理学部改組に伴って新設されたフィールド科学人材育成プログラムも3年目を迎えました。この1年で大きく変わったことは昨年度10月に最初の学生が配属になったことです。本プログラムの最大の特徴は、理学部と農学部の教員が協働で授業や実習を担当する全く新しい学部横断型プログラムであることで、第1期生は理学部10名、農学部11名でした。平成30年9月21日の両学部の共同ガイダンスで初顔合わせ、履修上の注意や卒業までのロードマップなど全体説明の後、教員も含めた交流会を実施して、大変良いスタートを切ることができました。

学生の配属にあたって当プログラムで特に留意していることは、理農両学部の学部色を強く出さないことです。学生は書類上は理農両学部のいずれかに所属していますが、配属後のカリキュラムは全く同じで、学生は所属学部を意識しない形で授業を受けることができます。当プログラムを担当する教員も理学部、農学

部、本年度より改組で佐渡3施設が統合した佐渡自然共生科学センター、災害・復興科学研究所など多岐に渡っていますが、学生には当プログラムに関わる教員は約30名いて、4年次の卒業研究は30の研究室から選ぶことができることを、最大の魅力として伝えていきます。つまり理学部所属の学生も農学部の研究室で卒業研究をすることが可能であるということです。

順調にスタートした当プログラムですが、両学部にもたがえることで全てが初めてのケースで、特に授業の履修に関しては想定外のこともしばしば起こります。ほとんどは手続き上の問題で、両学部で連携して対応する体制ができており、学生に不利益がないように今後も協働で慎重に進めていきたいと考えております。

本年度第1期生は3年生となり、当プログラムの目玉でもあるフィールド実習科目が本格的にスタートしました。実習系科目のほとんどは春～秋に開講されるため、学生たちも大忙しのようです。また佐渡自然共生科学センターの先生方の授業科目が多いことも特徴です。佐渡の先生方の負担を軽減するために佐渡の3施設と五十嵐キャンパスを結ぶTV会議システムの導入を進めており、今年度後期から本格的に授業に活用されることになっています。

当プログラムの知名度はまだ十分とは言えないので、リーフレットも更新し、在学生を対象とした「フィールドナビ」、高校生向けの「オープンキャンパス」や高校教員向けの「アドミッションフォーラム」などを通じて引き続き積極的な広報活動を進めています。同窓会の皆様には当プログラムの今後に期待して頂き、また暖かいご支援を賜りたくお願い申し上げます。



理学部 後援会 より

後援会会長 渡邊 俊弘

新潟大学同窓会会員の皆様には、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。また平素は後援会の活動にご協力を賜り厚く感謝申し上げます。

理学部の平成30年度卒業生の進路状況は、約半数が大学院へ進学、約4分の1が民間企業への就職、次いで公務員、教員となっております。就職にあたり学生達が高い期待と評価を頂けるのは、ひとえに先輩である皆様方の社会でのご活躍の賜物であると大変感謝いたしております。

在学生においては、29年度に改組された新カリキュラムのもと、専門的な分野を追求するだけでなく、分野を超えて広く総合的に学び、日々変化する社会や環境に対応できる理系人となるべく、先生方の熱心なご指導のもと、しっかりと勉学に励んでいるようです。保護者といいたしましても、先生方との

ご協力のもと、しっかりとバックアップしていきたいと思っております。

また今年も、昨年に引き続き国際交流事業、キャリア・フォーラム等素晴らしい企画も多く予定されており、先日開催されたフィールズ賞（数学のノーベル賞）を受賞された森重文博士をお招きしてのシンポジウムも大盛況でした。先生方のご尽力に感謝するとともに、後援会としましても引き続き陰ながら協力していく所存であります。

同窓会会員の皆様には、学生が自信を持ち社会に貢献できるようご指導そして応援して頂けたらと思っております。

今後とも皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

支 部 だ よ り

数 学 科

支部長 武石 文雄

平成31年(令和元年)度は、4月20日に役員会を開催し、スタートしました。ここで30年度事業実施報告、30年度収支決算報告を行うとともに、平成31年(令和元年)度事業計画及び予算案を作成いたしました。6月29日には、理学部同窓会の前に理事会を開催し、これらを報告し承認をいただきました。また、来年3月に退職される印南先生・羽鳥先生の退職記念祝賀会を開催することとし、日程については現在未定ですが、開催の第1報は今年の理学部同窓会報に同梱することといたしました。

なお、昨年もお願いたしました、10月の在校生と卒業生との懇談会の講師の選任に毎年苦勞をしております。自薦他薦は問いませんので、候補者を事務局まで連絡していただくと大変ありがたいです。

物 理 学 科

支部長 麩沢 祐一

物理支部は、理学部物理学プログラムが主催する6月11日(火)のケルビン祭の支援をまいりました。その際、行われる物理学科同窓会奨励賞に対して表彰学生3名への賞品と、チームチーティングをする学生への謝金の補助金とその内容です。これからも支援していくつもりです。

また、物理プログラムに対して同窓会物理支部としてどのような支援ができるかを検討してまいりたいと思います。

どうかよろしくお願い申し上げます。

化 学 科

支部長 畠野 弘通

役員の方々のご協力のもと、理学部同窓会の代議員会や総会、全学同窓会交流会、会報の編集などに参加して参りました。

また本年度は、「化学ホームカミングデー・卒業生と在校生の交流」事業を、支部で初めて支援いたしました。企業、公務員、教員として活躍している同窓生が、化学プログラム・化学コースの学生に講演と懇談を行いました。学生が就職後のキャリアパスをイメージするのに貢献できたと考えます。次年度も化学プログラムをはじめ皆様方から企画・提案があれば、予算の範囲で、ご支援いたします。事務局を通して、お尋ねいただければ幸いです。

理学部は、一学科となり三年、変革が続いています。皆様方には、学部行事に参加いただくなど、今後とも、ご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。

生 物 学 科

支部長 荒木 勉

同窓生の皆さん、いかがお過ごしでしょうか。

いつものことながら活動数・事業数が少なく恐縮しております。

新大理学部では、一昨年度から理学科一学科のみの

募集へと大幅に改組を行いました。昨年後期からは、改組一期生が7コースそれぞれへ進級いたしました。各コースの枠組みを少々広く設けたこともあって、ほぼ学生の希望通りに進級できたとのこと。

しかし、大学側の多くの努力、各高校への営業、説明会、高大連携の行事等の開催にもかかわらず、高校生には魅力ある大学とは感じてもらえないようで、受験志望者数は2倍がいいところで、志望者増には繋がってはいないようです。

そこで昨年度も同窓会生物学科支部が主催して、「高校の生物教員と理学部生物学科教員との交流会」を、今年2月に開催いたしました。昨年10月からは改組一期生が各プログラムに進級したことを受け、学部改組や生物学プログラムの説明と、現教育課程が大幅に分子生物学的な内容にシフトしていることから教科書の内容に関するセミナーをも開催いたしました。今回は、動物発生の分野を井筒ゆみ先生にご講義頂きました。高校教員29名、生物学科教員8名、同窓会役員2名の計39名の方々にお集まりいただき、併せて生物学科の先生方との懇親会も行うことができ、皆様方から大変よい反応を得ております。

今後の同窓会の活動としては、同窓生、院生、学生、生物学プログラムの先生方と日常的な交流や親睦の進め方、また、学生・院生の将来の志望や進路などにどのように関わっていけるかなど、後輩への支援活動を増加させていく必要があると思っております。

どちらにしろ、生物学科支部の日常の活動の幅をどのように広げていくか、まだまだ悩ましい日々が続いております。

地 質 学 科

支部長 豊島 剛志

2018年度の新潟大学祭(理学部では初雪祭)に合わせて、当支部の支援のもと、「地質まつり」(2018年10月20日～同21日)と「地質科学科の未来に向けて:卒業生と在校生の集い」(2018年10月21日)が開催されました。一般向けの普及活動イベント「地質まつり」には2日間で卒業生を含めて514名の方々が参加されました。「地質科学科の未来に向けて:卒業生と在校生の集い」では卒業生3名がそれぞれの仕事に関する口頭発表を行いました。同じ会場では卒業生16名によって、それぞれの仕事についての13のポスター発表も行われました。地質コンサルタント会社、建設コンサルタント会社、石油・天然ガス開発会社、国立研究開発法人、教育委員会、博物館、NPO法人にて活躍されている卒業生による発表でした(口頭発表:鹿澤優祐氏(平成26年度卒、八千代エンジニアリング株)、山田和生氏(平成3年度卒、日本工営株)、柿崎 聡氏(昭和62年度卒、JX石油開発株)、ポスター発表:件数が多いので省略)。集いで発表や交流を通して卒業生と在校生との交流が図られ、在校生はそれぞれの進路を考える上で貴重な情報や材料を得ることができたようです。10月20日夕刻から、例年通り理学部玄関前にて「秘酔」が開催され、卒業生・在校生・教員の懇親が深められました。

2019年新年会はインフルエンザの流行などの諸事情により中止となりました。

2019年度の集中講義「土木地質学」の担当は増村通宏氏(昭和61年度卒、(株)新協地質)です。

理学部が理学科1学科となって3年目の今年度、地質科学プログラムとしての進級論文(野外実習A)が初めて行われます。地質科学科の地質調査法・野外実習関係の授業を解体・改変した新カリキュラムによって教育を受けた地質科学プログラム3年生20数名が長期の野外地質調査に初めて取り組みます。地質科学教室では、これまで「地質調査」「地質調査に基づく研究」なら「新潟大学理学部の地鋳・地質」と言われていた伝統を維持・強化できるよう、努力・精進を続ける所存です。同窓生の皆様には、地質科学教室と同窓会へのご指導ご鞭撻をいただきますとともに、変わらぬご支援の程、よろしくをお願いいたします。



自然環境科学科

支部長 尾原 祥弘

昨年10月13日に第18回創環会総会を開催しました。同日に開催した在学生向けの就職支援講演会では4名の同

窓生に講演をお願いしました。特に、今回は初めて大学で研究職についている方に話をしていただくことができ、貴重な話を聞くことができたのではないかと思います。また、スポーツ交流会では、在学生と同窓生が入り混じってフットサル、ドッチボールを行いました。懇親会では、昨年度で退官された酒泉満先生もご出席され、先生を囲んで古株から若手まで大変話が盛り上がっていたようです。

さて、今年度も10月の総会に向けて準備を進めているところですが、会員の数も600名を超え、組織としても大きいものとなっています。そして、同窓会の運営も難しさも変わることはありません。来年度は、節目となる20回目の総会となります。そこで、今後の活動の方向性を示すことができるように、この一年取り組んでいくつもりです。色々な形で皆様の意見をお聞かせ願えれば幸いです。

また、最後になりますが、現在SNSの有効利用を模索中です。総会だけではなく、もっと気軽に同窓生が集まれるような小さなイベントを企画して発信できたらと考えています。手探りではありますが、準備ができましたら皆様にお知らせします。

全学同窓会からのお知らせ

◆新潟大学・全学同窓会交流会

令和元(2019)年10月19日(土)15時40分よりANAクラウンプラザホテル新潟にて新潟大学・全学同窓会交流会が開催されます。今回は新潟大学名誉教授の吉江弘正先生より「お口から考える健康長寿」と題して、ご講演いただきます。その他、特別企画として新潟県醸造試験場長の金桶光起氏より「新潟の酒造り」と題した話題提供もごございます。ご都合のつく方は是非ご参加ください。詳細は全学同窓会HP、広報紙「雪華」18号をご覧ください。

◆雪華支援事業について

「新潟大学の発展と社会への貢献に資する」とい

う全学同窓会の運営理念に合致する事業を支援するため、平成20(2008)年度から公募型の雪華支援事業(1件あたり50万円以下の助成)を実施しています。平成30(2018)年度も新潟大学図書館の2団体を含む22団体に助成しました。これまでの採択事業の詳細は全学同窓会HPに公開されています。

◆賛助会費納入のお願い

前述の「雪華支援事業」の予算は同窓生からの賛助会費を原資としています。応募件数は年々増加しており、採択された事業は、母校のブランド価値の向上、好感度アップにも貢献しています。事業拡大のためにも全学同窓会の賛助会費の納入をお願い申し上げます。

首都圏同窓会

と私

首都圏支部の近況

首都圏同窓会会長 安藤 勝利

日頃より首都圏同窓会の活動に温かいご支援を頂き感謝しております。本年は6月22日に第34回新潟大学理学部首都圏同窓会を東京新潟県人会館(台東区上野)で開催いたしました。毎年恒例となっている前段は、前野理学部長より「理学部の現状と未来」と題して大学の近況についてご紹介を頂いた後に、サイエンスセミナーとして、新潟大学自然科学系フェローの内海利男名誉教授から「タンパク質合成の仕組みに新知見:リポソームには触手がある」と、国立科学博物館の神澤秀明研究員から「古代ゲノムデータから見た日本人の起源と成立」と題した今日的な大変興味深い講演を頂きました。

総会では会計報告、役員改選があり、その後出席者全員で記念撮影をしました。

懇親会では、ケータリングで取り寄せた料理や新

潟のお酒などと共に、講演の感想や同窓生の活躍、近況などが話題となり、あちらこちらで輪となって話が盛り上がりました。

本年の参加者は約40名、例年に比べ若干減ってきています。毎年どうすれば、参加者が増えるのか、幹事会で話し合っております。そんな中で今年は、理学部の新卒者や、首都圏に在住されている理学部の卒業生の方に首都圏同窓会があるんだということを知ってもらおうと「首都圏同窓会へのお誘い」というリーフレットづくりを行いました。同窓生の皆様におかれましては、ぜひ参加され、旧交を温めていただければと思います。今後も、首都圏同窓会の活性化に向け取り組んでいきたいと考えておりますので、一層のご指導とご支援をよろしくお願いいたします。

若手卒業生 から (実社会に出て)

数 学科

2019年卒 酒井 広之



私は2019年3月に数学科を卒業し、現在はSEとしてIT企業に勤務し、4月から3ヶ月間の新人研修を受けています。7月からはクラウドやデータ分析を扱う部署に配属されることが決定し、現代の新しい技術に携わることができると嬉しく思うと同時に、新たな環境に対する不安を感じています。

これまでの社会人生活を通して、数学を学ぶ中で身についた「考え抜く体力」「多様な考え方」「説明する力」は常に仕事で活かることが分かりました。また、数学の知識はプログラムを理解したり、書いたりする上で非常に役に立っています。

今は、技術者として未熟ですが、今後は実務経験を重ねながら技術を高め、1人前の技術者を目指して努力を続けていきたいと思っています。

化 学科

2019年卒 品田花菜子

今年の春、理学部化学科を卒業し、私は今、新潟市内の高校で教員として働いています。そして、高校の頃からの夢であった「化学の先生」として、充実した日々を送ることができていることをとても幸せに感じています。

働き始めて数ヶ月、毎日が学びと驚きの連続です。実際に現場に出てみると、教育実習で学んだことがほんの一部にすぎないということがよくわかります。人を育てる仕事であるため、教科指導も生活指導も、ひとりひとり変わってきます。指導が正解だったのかは、すぐには分かりません。しかし、指導の成果が現れ始めたときの喜びが、教員のやりがいのひとつになっていると思います。

まだまだ未知なことだらけですが、生徒と共に成長していけるよう、楽しみながら精進していきたいと思っています。



物 理学科

2019年卒 佐藤 麻衣



私は理学部物理学科を卒業後、経済産業省に就職し、現在は再生可能エネルギーの普及に向けた政策立案を行う部署に所属しています。

現在所属している部署は、学生時代の専門とは直接関係はありませんが、再エネ関係の技術的な理解のために

は、科学的知識も役立っています。

入省してから息をつく間もないほどのスピード感で毎日仕事をしており、多忙を極めている状態ではありますが、その分自分が成長できる貴重な機会を頂いていると感じています。自分の力不足を痛感して悩むことも多々ありますが、周囲の優秀な先輩たちから多くのことを吸収し、日々成長していきたいと思っています。

生 物学科 「日々精進」

2017年卒 鈴木 皓哉

大学院の修士課程を修了してから3ヶ月を迎え、卒業後は東京都内の食品メーカーに就職しました。入社してからの1、2ヶ月は、社会人としてのマナーや仕事の進め方、自社の事業について研修を通じて学びました。特に研修中には、研究室で学ばせて頂いた実験に取り組む姿勢や手法、研究室の管理や運営など大いに役立ちました。最近ではようやく研修が終わり本配属となり、自身に開発のテーマが与えられ、これから本格的な仕事が始まって行きます。今後は、研究室生活を通して築くことができた「日々精進」という信念を原動力として、貢献していきたいと考えています。



現在、充実した社会人生活を送ることができているのは、大学時代の先生方や先輩方のご指導の賜物です。お世話になりました方々の期待に応えられるよう、日々精進してまいります。



地質科学科

2016年卒 鈴木 敬介

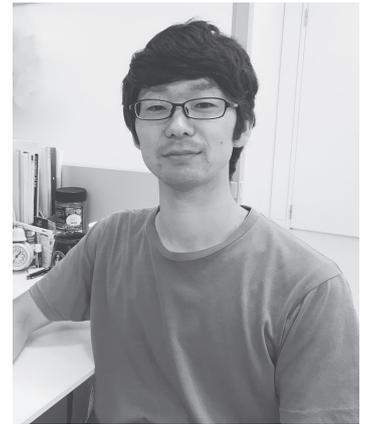


当記事の内容とそぐわず大変恐縮ですが、私はまだ社会に出ていません。昨年度に新潟大学大学院の地球科学コースを修了し、今春からは当コースの博士後期課程に進学しました。決して社会へ出るのが嫌なわけではありません。これまで他の学生が華々しく社会に出ていく姿を横目に眺め、私は自分の人生観を変えてしまうほど「地質学」に没頭してきました。言い換えれば、山を越え、沢に浸かり、自ら観察した地層や岩石がいつ、どこで、どのように出来たのかを常に考えて生きていくにつれ、「この世で自分だけが知っている新発見・考え」にたどり着く「喜び」から逃れることができなくなってしまったのです。

今の私に社会への関りを求めるとしたら、自分が手に入れた「喜び」を論文として一つでも多く世に残すことでしょうか…。私が社会に出るのはもう少し先になりそうです。

自然環境科学科

2014年卒 星 一平



私は現在、大学院の博士課程に在籍し、気象の側面から地球温暖化に関する研究を行なっています。博士課程に進み感じた事は、これまで以上に研究活動の幅が広がったという事です。研究成果は英語で論文にまとめるだけでなく、研究資金を獲得しカナダの大学に滞在したり、国内外の学会・研究集会に参加して多くの方々との議論を交わす機会も増えました。指導教員の主導する国際プロジェクトの枠組で、海外の研究者との共同研究を行う機会にも恵まれています。

そして私はいま、今夏の学位取得に向けて、博士論文の執筆に取り組んでいます。これからは、指導教員から学んだ事を忘れず、一人の研究者として気候研究の発展に貢献できるよう、努力を続けていきたいと思っています。

表3 理学部同窓会整備・振興寄付金 提出者御芳名(敬称略) 2019年6月現在

● 数学科

戸井田 正	高橋 哲夫	細野 晃	笠原 宏文
菊部 富雄	岩野 文子	飯田 昭男	長谷川 貴久
阿部千鶴子	岩田 博和	武藤 好伸	中田 彬
伊藤 道一	本家 武子	石井 一也	関野 文瀬
吉岡 智晃	井村 悦子	田中 環	伊藤真知子
堀 行	池 順一	鈴木 哲	佐々木 潔朗
佐藤 英男	加藤 俊男	佐藤 浩一	伊藤 健志
千葉 宏	山口 真理	二瓶 静夫	高橋 峰洋
吉川 益男	田中 宏	渡辺 譲	柄澤 涼司
伊藤 通明	伊東 孝芳	角井 伸一	土屋 亮人
小田 武夫	日比登史男	池田 英雄	上野 拓弥
樋浦 卓嘉	原 幸仁	小林 伸弥	長谷川 純
寺尾 芳樹	竹内 正文	小高 叔子	清塚 拓也
金子 正義	青木 孝史	牛丸 智博	
井上 昭導	米沢 新司	若杉 正嗣	

● 化学科

片桐 啓三	今井 朋子	矢口たみ江	斎藤 博之
土田 雅子	青木 英二	山口 衛	横田かおり
藤崎千代子	岩野 宣哉	羽深 等	横田 高明
渡辺 初男	宮下 育子	丸田 文之	赤間 智也
森谷 和子	吉川 義雄	石田 秀一	矢部真由美
梅澤 貞雄	久保田芳宏	小嶋 淳	小嶋 素志
田巻 繁	小林 和雄	尾崎 恭子	棚橋 美咲
野島 威邦	田中 順一	山岸 良一	村山 明弘
三屋 彰	大橋 幸子	谷口 素子	吉田 勝美
長屋 典	殿内 重政	青柳 義昭	中林 哲也
松澤 澄江	土屋真知子	中野 国芳	佐藤 正也
田才 邦彦	齋藤 清	吉井 文子	近藤 健一郎
塩畑 ツネ	浅井 恒雄	三ツ寄敏雄	三留 和子
佐藤 茂司	遠藤ひろみ	荻野 健	山田 幹
井古田仁司	山崎 俊雄	田邊 薫	根岸 裕太
関川富士夫	星野 洋子	橋本 雅文	片桐 基維
松尾 昭夫	嶋野 弘通	樋口 靖	田中 大地
半田 進	福本 一郎	岩崎 匡臣	關 裕也
赤沢 宏	福島 幹雄	松田 高至	鈴木 俊雄

● 物理学科

貝沼 次郎	洪谷 龍生	渡辺 孝一	鈴木 俊男	志賀 莊一郎
森山 久夫	松本 忠	渡辺 俊英	矢代 博行	清水 佳之
小林 修	田中 則臣	坂井 貞夫	東海 良樹	山崎美穂子
駒野 庄平	小林 一男	垣内 信夫	鈴木 重行	本田 瑞枝
小池 潤治	高崎 功一	藤井 博	藤藤 清悦	須田 孝司
赤塚 節	丸山 敬	高木 広道	羽賀 成基	菅野 義博
土田 登	野本 憲雄	若林 恒夫	佐藤 弘	南 祥平
柳 雄二	本間 正宣	白川 保憲	工藤 幸人	加藤 澄也
多田 健一	小川 迪助	原 外満	風間 睦勇	佐藤 正将
畑野 清司	堀 勝三	青柳 秀一	佐藤 修	比嘉 駿
中川 哲昌	堀 俊彦	上林 俊一	黒田 徹	高田 和樹
関 正	寺前 直子	福本 彰	黒田 昌基	高田 和樹
滝澤 進	寺井 宏	高見沢 一男	田中みちる	サトウ ケイ
寺井 宏	関川 光博	中村 一昭	山田 高嗣	

● 生物学科

曾我 浩	細野 正道	信田 庸二	菅原 秀記	櫻井 幸枝
平林 光雄	小川 忠雄	石坂 均	藤原 信一	石井 健一
伊東 和江	樋浦 明夫	大内 弘徳	高橋直一郎	山崎浩太郎
内田 善晤	箕輪 正和	大久保 易	猪熊 正則	中田 智幸
伊藤 正一	長谷川 英男	磯部 浩伸	頓所 裕史	望月 正弘
長谷川 博	正田 豊	菅原 秀記	榎本喜美子	渡辺 直樹
清水 榮一	加藤 俊成	菅原 通博	門脇 康之	小林雄大朗
星野嘉恵子	林 正栄	伊藤 達朗	松本 真実	笠原 杏子

● 地質科学科

畑中 博文	佐々木 正	小川 泰正	高橋 努	田利信二朗
近藤 和久	浜崎 邦正	中川 充	田中 力	八木 郁恵
加藤 靖夫	岡田 正明	飯野 芳則	杉山 和稔	八木 郁恵
石橋 輝樹	熊谷 誠	清水 功	柿崎 聡	小高 光
吉田 滋	伊藤 昇	小山内康人	佐藤 壽則	阿彦 貴之
山野井 徹	伊豫田成子	青野 道夫	佐久間 幹	眞鍋 達郎
中戸 義興	深澤 光	滝本 俊明	小島 玄生	
沼田 誠	八幡 正弘	栃原真与子	榎本 武敏	
小村 寿夫	薦田 靖志	橋詰 隆美	竹内 仁哉	

● 自然環境科学科

小川 尚之	松橋 麻里	天笠 泉	斉藤 大作	石塚 紀夫
中島 陽子	平野 裕			

表1

2018年度 理学部同窓会決算

一般会計

収入の部	費目	予算額(A)	決算額(B)	比較(B-A)	説明
	終身会費・寄付金	5,000,000	5,060,000	60,000	
	終身会費	4,000,000	3,960,000	-40,000	198名×20,000円
	寄付金等	1,000,000	1,100,000	100,000	同窓会整備・振興寄付金 289名
他会計繰入金			0	0	
雑収入	78,000	105,427	27,427		預貯金利息、全学同窓会資料同梱発送費清算、等
繰越金	1,581,399	1,581,399	0		
合計	6,659,399	6,746,826	87,427		

支出の部	費目	予算額(A)	決算額(B)	比較(B-A)	説明
	会議費	150,000	104,316	-45,684	
広報費	1,691,700	1,689,410	-2,290		
	「会報」発行費用	400,000	374,220	-25,780	「会報19号」7500部
	「理学部は今」発行費用	380,000	378,000	-2,000	同窓会分 7000部
	会員宛資料配送費	906,000	931,655	25,655	6627名分
	その他	5,700	5,535	-165	HP運営費
事業費	1,265,000	1,064,930	-200,070		
	理学部支援事業費	720,000	660,000	-60,000	グローバル人材育成推進事業・卒業祝賀会・等支援
	支部事業補助費	450,000	319,000	-131,000	生物、数学、自然環境科学、地質科学各学科支部へ助成
	名簿編集費	20,000	0	-20,000	
	その他事業費	75,000	85,930	10,930	特別講演会経費
負担金等	489,350	489,350	0		全学同窓会賦課金
支部交付金	460,000	460,000	0		6支部及び首都圏支部
事務諸経費	85,000	95,064	10,064		光熱水費、消耗品等
事務局費	400,000	357,700	-42,300		事務局人件費
人件費	200,000	192,000	-8,000		後援会パート手当
予備費	418,349	0	-418,349		
他会計(積立金特別会計)繰出金	1,500,000	1,500,000	0		2017年度積立金の繰越執行を含む
次年度繰越金	0	794,056	794,056		
合計	6,659,399	6,746,826	87,427		

特別会計

特別会計	費目	収入	支出	残金	説明
	2017年度までの繰越金			14,000,085	定期預金
	2017年度分繰入れ金	1,000,000		15,000,085	年度当初に過年度分を繰越執行
	2018年度繰入れ金	500,000		15,500,085	
	2018年度利息	85		15,500,170	定期利息の内、定期元金に振替えられる部分 他は一般会計へ

表2

2019年度 理学部同窓会予算

一般会計

収入の部	費目	前年度予算額(A)	今年度予算額(B)	比較(B-A)	説明
	終身会費・寄付金	5,000,000	5,000,000	0	
	終身会費	4,000,000	4,000,000		入学定員200名×20,000円
	寄付金	1,000,000	1,000,000		同窓会整備・振興寄付金等
他会計繰入金	0	0			
雑収入	78,000	78,000	0		全学同窓会同梱発送費清算 等
繰越金	1,581,399	794,056	-787,343		
合計	6,659,399	5,872,056	-787,343		

支出の部	費目	前年度予算額(A)	今年度予算額(B)	比較(B-A)	説明
	会議費	150,000	175,000	25,000	
広報費	1,691,700	1,745,700	54,000		
	「会報」発行費用	400,000	400,000	0	
	「理学部は今」発行費用	380,000	380,000	0	
	会員宛配送費	906,000	960,000	54,000	会報等郵送料・運賃等
	その他	5,700	5,700	0	HP運営費
事業費	1,265,000	1,265,000	0		
	理学部支援事業費	720,000	720,000	0	
	支部事業補助費	450,000	450,000	0	
	名簿編纂事業費	20,000	20,000	0	
	その他	75,000	75,000	0	特別講演会事業
負担金等	489,350	489,350	0		全学同窓会賦課金
支部交付金	460,000	460,000	0		6支部及び首都圏支部
事務諸経費	85,000	123,000	38,000		光熱水費、消耗品等
事務局費	400,000	400,000	0		事務局人件費
人件費	200,000	200,000	0		後援会パート手当
予備費	418,349	514,006	95,657		
他会計繰出金	1,500,000	500,000	-1,000,000		2019年度積立金
合計	6,659,399	5,872,056	-787,343		

特別会計

特別会計	費目	収入	支出	残金	説明
	2018年度までの積立金			15,500,170	
	2019年度積立金	500,000		16,000,170	
	2019年度利息	85		16,000,255	

